

## 「第9回くまもと活性化フォーラム」結果概要

日時 : 令和5年11月29日(水) 13:40~16:45  
場所 : 熊本地方合同庁舎 A棟 1階 共用会議室  
テーマ : 「中小企業におけるDXについて考える: その意義と課題」

### 1.挨拶 九州財務局長 河村 企彦



### 2.講演 13:45~14:00

「九州企業のDXの現状と政策動向」 九州経済産業局地域経済部次長 平田 実 氏



3. 講演 14:00~14:45

「中小企業のDX推進事例～デジタル技術を使ったビジネスモデル変革へ～」

株式会社DX経営研究所 代表取締役 中尾 克代 氏



4. 講演 15:00~15:45

「製造業におけるDXの取組み～カーボンニュートラルに向けて～」

武州工業株式会社 相談役 林 英夫 氏



5. 講演 15:50~16:10

「地域 DX 推進における肥後銀行の取組み」

株式会社肥後銀行経営企画部デジタル戦略室長 高田 賢治 氏



6. 意見交換 16:15~16:45



○フォーラム構成員からの主な質疑

Q. 部分最適を全体最適にするのが一番大変。全体最適にするコツはあるか。

→ (登壇者)

・経営者は経営ビジョンやその大義を示しながら、一方で、一つ一つの小さな業務において、DX導入の成功体験を積むことで社員に仕事が楽になったことを体感してもらうなど、小さな成功体験を積み重ねてもらう。

Q. DX化は世界的な流れかと思うが、日本人特有の考え方に寄り添いつつ、社員の就業時間短縮に結び付けるにはどうしたらいいか。

→ (登壇者)

・何が何でもDXをしないといけない、ということはない。例えば職人技などはデジタル化できない。一方でバックヤード業務はデジタル化の余地が大きい。会社として注力すべきところに注力する一方、省ける無駄は省いていく。例えば、業務の報告書は何のためにあるのかを考えると、顧客に価値を提供するためである。タブレットなどのデジタルツールやチャットの導入などでやり方を変えることによって生産性を上げ、労働時間を短縮することが可能になる。

Q. 自発的に学べる勉強会を設けているとのことであるが、仕組みや内容について詳しく教えてほしい。

→ (登壇者)

・以前は勤務時間外に行っていたが、今は勤務時間中に行っている。全社員が二つの勉強会に必ず所属するような仕組みとしていて、月に最低4時間は勉強会に参加している。社員自らテーマを決め、自発的に参加したいと思えるような、参加型・自立型の勉強会を行っている。

(感想)

・当社がDX化を行う中で良かった点は、モノの流れ、お金の流れの双方が「見える化」され、把握できるようになったこと。部門ごとの限界利益率が出せるようになり、財務の状況が明確になると社員が考えて行動するようになり、人員の再配置も可能になった。社員の中から「別の事業も行った方が良くはないか。」との案も出てきている。IT化、DX化で会社に変革が起き、「見える化」によって社員自らが変わった。

(感想)

・半導体関連の企業、デジタル化が進んだ企業が多く熊本にやってくる中、DXの時間軸をどうとらえるかが課題であると感じた。今後変革が起きたときに、DXが非常に重要で、しっかり備えておかなければならないとよく指摘される。我々も社内だけではなく外部と連携しDX化を行うことが非常に重要だと感じた。

Q. 変革のビジョンがあっても全社員の意識をそこに向けるのは難しい時はどうすればよいか。

→ (登壇者)

・例えば一般的に、製造と営業は対立しがちだが、お互い何をしているか明確にわかっていない。お互いコミュニケーションを取りながら他人の靴をはいてみる、そうすると課題が明確化する。さらに、製造と営業と一緒に提案を行うと、一層コミュニケーションが活発化していく。部門の壁については経営者が少し仕掛けてあげると良い。例えば社長が各部門の担当者に細かくヒアリングを行い業務の細部まで把握し、部門間で人員を入れ替えたりすることにより、社員自身がどうやって改善したらよいか自分たちで考え自走していく。

(感想)

・先日、台湾のシリコンバレーと言われる新竹でこれまで起きたことがこれから熊本で起きるとの話聞いた。本日のお話では、DXを用いてヒトモノカネ全ての社内体制の整備を行われており、多くのヒントを頂いた。

→ (登壇者)

・重要なのは今いる人を辞めさせないこと。デジタル人材を増やそうにも、外部に求めると社長の給料よりも高くないと人が集まらず、難しい。内製化しかなく、誰一人取り残さず、社員全員を育てる、という姿勢を経営者が見せると、社員一人一人が責任をもって今の仕事をするようになる。一人一人が社長になったつもりで、経営者のマインドを持ってもらう。経営者は、場づくり、マインドセットを一生懸命行っている。